

文部科学省「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」(令和7年11月10日)

千葉大学教育学部 地域教員希望枠における「外国にルーツのある子の支援」の取り組み計画について

千葉大学教育学部長 藤川 大祐



令和6年6月18日

地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業について 公募の結果、21件を選定しました

令和6年度「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」について、
選定事業を21件決定しました。

記

1. 事業の背景・目的

本事業（令和6年度予算額：4.5億円）では、大学と教育委員会が連携・協働し

- ・大学入試における「地域教員希望枠」の導入
- ・当該学生への地域課題に対応したコース・カリキュラムによる教育
- ・高校生に対する特別プログラムの導入

など、大学入学前から教員採用に至るまでの一貫した取組を促進し、地域や現場ニーズに対応した質の高い教師を継続的・安定的に養成し、確保するための取組に対して支援を行うことを目的としています。

2. 審査状況

令和6年3月19日付けで教職課程の認定を受けて公募を行い、3月19日から4月19日に地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の公募結果について、このたび、別紙のとおり21件の事業が選定されました。

3. 選定事業

- ・選定大学の取組概要として、採択大学一覧を
- ・また、選定大学の取組概要については、後記のとおりを添付しております。

URL：https://www.mext.go.jp/a_menu/sh

- ・地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学立行政法人大学入試センター理事長)))に添付しております。



＜本件に関する
総合教育政
教員養成企
電話 03-5

事業実施大学名	千葉大学
取組名	地域に愛着をもち、「日本の縮図」千葉県の教育課題に強い教員の養成
連携する教育委員会	千葉県、千葉市
事業概要	
千葉県内の具体的な地域に愛着を持ち、「日本の縮図」である千葉県の課題に対応できる強みを持った教員の養成を目指し、千葉県教育委員会・千葉市教育委員会と連携して千葉大学教育学部の機能強化を進める。主な取り組みは以下の通り。	
1) 教育関連の活動を経験し、将来千葉県内で教員となることを志望する者を対象とした地域教育貢献選抜入試（仮）を導入。併せて、高校生等を対象としたセミナーやインターンシップの充実を図る。	
2) 「千葉県の教育を知る」バスツアー等に加え、「日本の縮図」としての千葉県の教育課題である「通常校での特別支援」「ICT活用・教育DX」「いじめ・不登校・外国にルーツのある子の支援」といったテーマ・プログラム、テーマに合った教育実習等で学べるカリキュラムを構築する。	
3) 地域への愛着と特定テーマに関する強みが活かされるような大学推薦採用並びに教員配置を、千葉県教育委員会・千葉市教育委員会にて実施する。	

令和6年度、文部科学省の「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」に、他の20大学とともに千葉大学が採択された。

千葉大学の取組名は「地域に愛着をもち、『日本の縮図』千葉県の教育課題に強い教員の養成」。

千葉県・千葉市の教育課題について、教育委員会等からヒアリング。特に重要な課題として、「通常校での特別支援」、「ICT活用・教育DX」、「いじめ・不登校への対応」、「外国にルーツのある子への支援」の四つを特定。

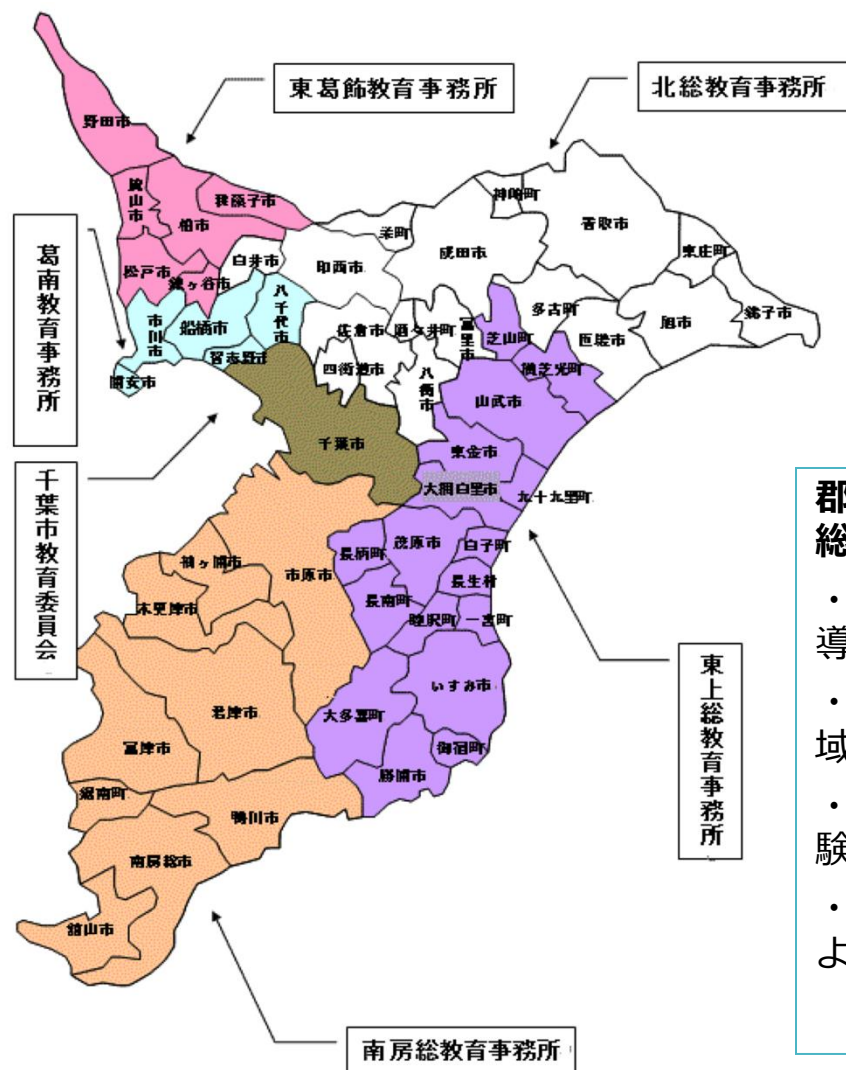
日本の縮図のような多様な課題を持つ千葉県の教育

全県共通（全国共通）の課題

- ・ **発達障害等、特別な支援を要する児童生徒への適切な対応。**（通級指導教室対象児童生徒数 令和3年度6,064名→令和6年度見込み7,586名）
- ・ **ICT活用や教育DXの推進。**（5年生までにICT機器を授業でよく使ったと回答した児童 全国28.2%、千葉県21.2%）
- ・ **いじめ・不登校への対応。**（いじめ重大事態 令和3年度30件→令和4年度63件、不登校児童生徒数 令和2年度7,850名→令和4年度12,082名）
- ・ **外国にルーツをもつ児童生徒への指導・支援の充実。**（日本語指導対象児童生徒数 令和3年度1,757名→令和6年度見込み2,609名）

都市部（主に千葉市・葛南・東葛飾）

- ・ 塾や習い事に通う子供も多いが、教科への関心の低さも課題に。
- ・ 児童相談所案件の増加も見られ、多様な家庭への対応に追われる教員の負担が課題に。
- ・ 一部で人口が急増。
- ・ 他機関との連携、教員としての視野の広さ等が求められる。



中間部（主に北総）

- ・ 外国籍の子供の増加。外国語活用能力、異文化理解、関係団体との連携が求められる。
- ・ ICT活用について、地域による差が大きい。

郡部等（主に東上総・南房総）

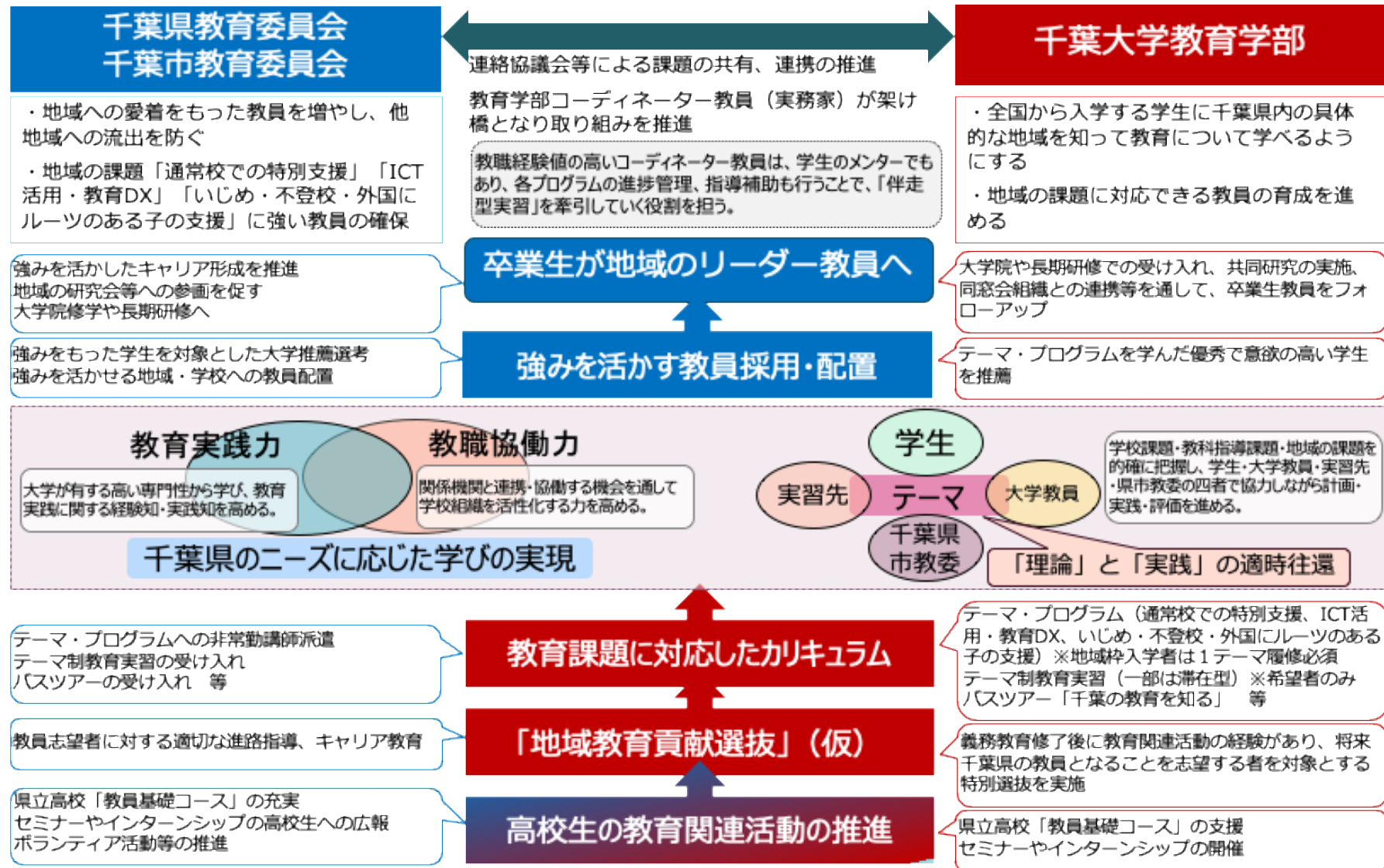
- ・ 学校規模が小さく専科指導が行えない。
- ・ 学校の統廃合が進み、地域把握が困難。
- ・ 単学級が多く、教員の経験不足が課題に。
- ・ ICT活用について、地域による差が大きい。

「教育課題に対応したカリキュラム」として、テーマ・プログラムやテーマ制教育実習を設定。このテーマの一つに「外国にルーツのある子への支援」を入れることとした。

申請大学名： 千葉大学

様式 3

取組名：地域に愛着をもち、「日本の縮図」千葉県の教育課題に強い教員の養成



令和9年度総合型選抜入試において「地域教員希望枠」入試（定員63名）を導入。令和9年度入学生よりカリキュラムを改革（令和8年度までは一部授業科目を先行導入）。

テーマ・プログラムは、講義・演習6単位＋インターンシップ1単位。

テーマ・プログラム

千葉大学教育学部では、令和9年度入試(令和8年度実施)から導入する「地域教員希望枠」で入学した学生に対して「※ **テーマ・プログラム** (千葉県内共通の課題に対応したプログラム)」を導入し、設定した4つのテーマから1テーマ履修(講義・演習6単位、インターンシップ1単位)を必須とし、指導主事や現職教員等による実践的な授業、さらに教育関係機関等でのインターンシップを取り入れます。

なお、このテーマ・プログラム修了者には、デジタルのオープンバッジを発行します。

※ **テーマ・プログラム** (4つのテーマ)

- 通常校での特別支援
- 外国にルーツのある子への支援
- いじめ・不登校への対応
- ICT活用と授業改革

※ **テーマ・プログラム** (4つのテーマ)

「テーマ・プログラム」で学ぶ学生のうち希望者については、テーマに関連の強い学校で教育実習を行うことができ、必要に応じて「滞在型教育実習」も可能とします。

これまでテーマ・プログラムは、「通常校での特別支援」、「ICT活用・教育DX」、「いじめ・不登校・外国にルーツのある子への支援」の3つで準備を進めてきましたが、内容をより充実させるため、4つとしました。(令和7年10月改訂)

教職課程コアカリキュラムで、外国にルーツのある子の支援が位置付けられているのは、特別支援科目。千葉大学でも「特別な教育的ニーズの理解とその支援I」等で扱っている。

特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

全体目標: 通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。

(1) 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の理解

一般目標: 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。

- 到達目標:
- 1) インクルーシブ教育システムを含めた特別支援教育に関する制度の理念や仕組みを理解している。
 - 2) 発達障害や軽度知的障害をはじめとする特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の心身の発達、心理的特性及び学習の過程を理解している。
 - 3) 視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱等を含む様々な障害のある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難について基礎的な知識を身に付けている。

(2) 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の教育課程及び支援の方法

一般目標: 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。

- 到達目標:
- 1) 発達障害や軽度知的障害をはじめとする特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する支援の方法について例示することができる。
 - 2) 「通級による指導」及び「自立活動」の教育課程上の位置付けと内容を理解している。
 - 3) 特別支援教育に関する教育課程の枠組みを踏まえ、個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成する意義と方法を理解している。
 - 4) 特別支援教育コーディネーター、関係機関・家庭と連携しながら支援体制を構築することの必要性を理解している。

(3) 障害はないが特別な教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の把握や支援

一般目標: 障害はないが特別な教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。

- 到達目標:
- 1) 母国語や貧困の問題等により特別な教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難や組織的な対応の必要性を理解している。

特別な教育的ニーズの理解とその支援 I / Understanding and Support for Special Educational Needs I

参考書 / Reference Books
備考 / Remarks

授業計画詳細情報 / Course Plan Detailed Information

第1回 (2025/10/07)	
主題と位置付け(担当) / Subjects and instructor's position	オリエンテーション 特別な教育的ニーズへの早期介入と早期支援の仕組みと課題
授業・学習方法や内容 / Methods and contents	就学前乳幼児の保健・教育・児童福祉の仕組みを理解し、それぞれの実践現場が抱える課題を考える
備考 / Notes	対面
第2回 (2025/10/14)	
主題と位置付け(担当) / Subjects and instructor's position	後期中等教育における特別な教育的ニーズ
授業・学習方法や内容 / Methods and contents	特別な教育的ニーズのある生徒の教育機関とサポート機関の仕組みを理解し、進路指導を考える
備考 / Notes	対面
第3回 (2025/10/21)	
主題と位置付け(担当) / Subjects and instructor's position	特別な教育的ニーズのある若者と就労、社会的自立
授業・学習方法や内容 / Methods and contents	特別な教育的ニーズのある生徒の卒業後のさまざまな支援の仕組みを理解し、キャリア教育を考える
備考 / Notes	対面
第4回 (2025/10/28)	
主題と位置付け(担当) / Subjects and instructor's position	外国ルーツと特別な教育的ニーズ
授業・学習方法や内容 / Methods and contents	外国籍で特別な教育的ニーズのある子どもが抱える困難や教育の現状を理解し、課題解決に向けた方策を考える
備考 / Notes	対面
第5回 (2025/11/04)	
主題と位置付け(担当) / Subjects and instructor's position	社会的養護と障害、学校との連携
授業・学習方法や内容	乳幼児と児童生徒の社会的養護の仕組みを障害と虐待をキーワードに理解し、施設/社会的養護者と学校との連携

国語学関連の授業で、外国にルーツをもつ子への支援を重点的に扱うことに（令和7年度より、担当：安部朋世教授）。専門家を講師に招く回も設定。

国語学講義Ⅳ（世界の中の日本語）

自 授業概要情報 / Course Outline Information

更新日 / Date of renewal : 2025/03/10

概要 / Brief Description

外国にルーツを持つ子どもたちが増えてきている現状を踏まえ、国語科教員として外国にルーツを持つ子どもたちに対しどのようなことが必要か、いくつかのテーマを設定し、テーマに詳しい専門家等の講義等も交えつつ、具体的な例を取り上げながら考察する。授業においては、受講者自身も実際に分析を行い、それらを共有し意見交換をしながら考察を深めていく。なお、本科目は、中学校コース国語科教育分野の「教科に関する専門的事項」に分類され、選択必修科目である。

目標 / Goals

外国にルーツを持つ子どもたちに対する理解を深めるとともに、国語科教員を目指す立場から、日本語を相対化して分析・観察する力を養うとともに、日本語に対する理解を深める。

1. 当該テーマに関する基礎的事項についての理解を深められる。
2. 当該テーマについて国語学的視点から分析できる。
3. 身のまわりの言葉を国語学的視点で観察しようとする。
4. 課題に意欲的に取り組み、意見交換に積極的に参加できる。
5. 分析結果を論理的な文章にまとめることができる。

各回の内容

1. はじめに…外国にルーツを持つ子どもたちと学校現場
2. 外国人児童生徒等教育の現状 1 ―国語科教科書との関連を中心に―
3. 外国人児童生徒等教育の現状 2 ―地域別・学校種別の取り組み―
4. 外国人児童生徒等教育の現状 3 ―様々な状況にいる子どもたちと教育―
5. 外国にルーツを持つ子どもたちへの教育―日本語教育の観点から― 1
6. 外国にルーツを持つ子どもたちへの教育―日本語教育の観点から― 2
7. 外国にルーツを持つ子どもたちへの教育―日本語教育の観点から― 3
8. 小学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 1
9. 小学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 2
10. 中学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 1
11. 中学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 2
12. 高等学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 1
13. 高等学校における外国にルーツを持つ子どもたちへの教育 2
14. 外国にルーツを持つ子どもたちへの支援
15. まとめ…外国にルーツを持つ子どもたちへの教育・支援

・リライト教材を扱った小学校の事例
・国語科教育学、日本語教育学、日本語学の関係 等

（ゲスト講師による授業）
・CLD（Culturally and Linguistically Diverse）児童生徒の事例
・生活言語（BICS）と学習言語（CALP）
・学校口語文法と日本語教育文法 等

テーマ・プログラム「外国にルーツのある子への支援」については、既存の授業科目が少なく、令和9年度に向けて以下を検討中。

講義・演習科目（6単位必修）については、以下のような授業科目を8～10単位程度準備中。他部局の協力を得ることも検討している。

- ・異文化理解、多文化共生関係の授業科目。
- ・国語学、日本語教育関係の授業科目。
- ・学校現場や地域での支援の実際についての授業科目。
- ・県や市の教育センター等で実施されている教員研修に学生が参加させてもらい、これを単位化する。

インターンシップについては、集住地域で該当する児童生徒が多い学校や公立夜間中学等での実施を交渉中。

附属小学校・中学校における帰国生教育との接続ができないか、検討中。

この他、該当する児童生徒が多い学校でのテーマ制教育実習についても、千葉市教委等と相談中。

テーマ・プログラム「外国にルーツのある子への支援」で学生に学んでほしい中心的な内容項目としては、以下のことを仮に想定している。

1. 現状把握と基礎知識

- ・外国にルーツを持つ児童生徒の数的推移（国籍別・地域別・学校種別のデータ）
- ・用語の整理（外国にルーツのある子／CLD児童生徒／JSL児童生徒 など）
- ・日本における国籍原則（血統主義等）と就学義務の有無

2. 見立てと実態把握

- ・子どもや家庭に関する情報収集（来日時期、家庭言語、文化的背景など）
- ・「日本語力や文化の問題」を発達障害と誤認しない視点
- ・見立てのプロセス（知らない情報に気づく → 多角的に分析 → 指導の重点化）

3. 言語習得の理解

- ・第二言語習得の段階（会話的流暢さ／学習言語能力：BICSとCALP）
- ・言語発達と年齢・来日時期の関係

4. 学習上の課題

- ・教科学習日本語の難しさ（専門語、学術的表現、論理的記述）
- ・語彙・文法習得の課題（助詞、複文、同音異義語など）
- ・学習評価における不利（テストで実力を十分に出せない等）

5. 心理社会的側面

- ・日本語力不足からくる自尊心の喪失への対応
- ・異文化適応のストレスや孤立感への配慮
- ・心理的安定と情意面の支援（安心して学べる環境づくり）

6. 母語・母文化の尊重

- ・母語・母文化を「正当化」し、否定せずに活かす姿勢
- ・帰国生や外国につながる生徒の異文化経験を資源として活かすこと
- ・母語を保持・活用することの学習的・心理的意義

7. 教師の対応・学校の体制

- ・日本語指導の工夫（取り出し授業、通級、日本語指導計画）
- ・日本人児童生徒との協働学習・協働作業の推進
- ・学校全体・地域全体で支える体制づくり（多文化理解、保護者・住民への啓発）
- ・外部人材（日本語指導員、通訳、地域支援者）との連携

8. 日本語教育の方法と評価

- ・教授法の変遷（文法訳読法／オーディオリンガル法／コミュニカティブ・アプローチ／CLIL）
- ・教材の種類（生活日本語、学習・進学、ビジネス、専門分野など）
- ・評価指標とテスト（JLPT、OPI、SPOT、TTBJ、Can-do リスト、ポートフォリオ、ルーブリック評価）

9. 制度・法規的枠組み

- ・学習指導要領・解説における「外国人児童生徒等」への記載
- ・通級による日本語指導と教育課程上の扱い（小・中・高等学校）
- ・文部科学省や自治体の調査・方針（受入れ状況、集住化・散在化のデータ）

悩ましく思える点は、以下の通り。

学生の専門によらず、外国にルーツのある子への支援について重点的に学ぶ学生を増やしたいが、他方で日本語の扱いは重要。そうすると、国語教育が専門の学生に期待がかかってしまう。

現状の教職課程コアカリキュラムでは、外国にルーツのある子への支援が特別支援教育関連科目の中で扱われている。しかし、日本語が不自由な児童生徒を障害時と同列に見ることは、受け入れられにくいのではないか。特別支援教育とは別枠で、言語や文化の内容も含め、外国にルーツのある子への支援を扱いたい。

他のテーマについては、教育委員会や学校現場で、どのように取り組む必要があるか、どのようなことを学んでほしいかが、ある程度確立しているように思われる。しかし、外国にルーツのある子への支援については、教育委員会や学校にも、どのようにしていけばよいのかという明確な方向性が弱いように思われる。

本日は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。令和9年度からのプログラム導入に向けて、引き続き、カリキュラムの充実に取り組んでいきたいと考えております。ご指導、ご支援いただければ幸いです。